

小猿の恩返し

こざるのおんがえし



作：近藤せいけん



小猿の恩返し

むかしむかし、相模の国に煤ヶ谷村（すすがやむら）に幸助じいさんとおばばのきぬさんが住んでいました。

二人はとても親切で心優しい老夫婦でした。

ある日のこと、近くを流れる小鮎川（こあゆかわ）に幸助じいさんは魚釣りに行きました。

その日は風の強い日で、川面も少し波立っていました。

釣り竿のうきもよく見えず、魚も釣れません。

川に近い、切り立った崖の上の木に沢山の猿の一団がえさを求めて来ていました。

「ああ～今日はぜんぜん、釣れないなあ～しょうがない、風も強いし、ここらであがるとするか」

その時です、一匹の小猿が細い枝に飛び移ると同時に、「ぽきん」と根元から折れてしまい、小猿は川に「ドボン～」と落ちて、早い流れの中を浮かんだり、沈んだりして流されてゆきました。

沢山の猿がそのあとを追いかけてゆきました。

「キャッ、キャッ、キ、キ～」と大きな叫び声が山間にこだましました。

幸助じいさんがすぐに気がつき、急いで、流されてゆく小猿を追いました。

長い釣竿を伸ばしました。

「さあ～この竿に掴まれ。しっかりとな！」

小猿は必死に竿に掴まりました。

「さあ～岸によせるぞ！」

「よいしょ、よいしょ、どっこいしょう。それ、それ、どっこい、どっこい」と引っ張りました。

やっとの思いで、岸に小猿はたどり着きました。

沢山の猿が一斉に「キアーキアーキャッ、キーキー」

と鳴き声をあげ、まるで喜んでいるかのようでした。

仲間の猿が見守る中、河原をよちよち歩き、じっと幸助じいさんを見てから山に戻ってゆきました。

「さあ、家に帰ろうか。晩のおかずは釣れなかったが、良きことをした」
幸助じいさんは家にたどりついた。

「ばあさんや、今日は何も釣れんでよ。手ぶらじゃ」

「さようか、しかたなか。そういう日もありよう」

「さあ、自然薯（じねんじょ）をすって、たまごであえ、そばがきにして食べようかね」

「うんだ、そうしてくれ」

秋の日は釣瓶おとし。辺りはすぐ暗くなり、やがて夜になりました。

「さあ、そろそろ寝ようか。今日は疲れた・・・」

夜中、外で何か騒がしい音がしたが。

「おじいさん、何か音がしているが、何じゃろうね・・・」

「何に、風のせいじゃよ。寝よう、寝よう」とまた眠りについてしまいました。
よく朝、お日様が上がると、おばあさんが雨戸を開けました。

目をこすった、おばあさんが

「あれ～あんりゃあ、何んじゃ・・・おたまげた」

「じいさん、じいさん、早よう起きてみよ。早よう、早よう」と大声で呼びました。

「何んでえ～、ばあ～さん。何んでえー」

「あれじゃ、あれじゃ・・・」

「わあ～おたまげた。沢山の柿の山じゃ。くりの山じゃ。どんぐりの山じゃ」

「どうしたんじゃ・・・」

「何がおきたのじゃ・・・」

しばし、おじいさんもおばあさんも、沢山の柿の小山じゃ。くりの小山じゃ。ど
んぐりの小山に見とれていました。

ふ〜と、庭のけやきの木に目をやると、小さいな猿と母猿とおぼしき二匹の親子
猿がじっと、おじいさんおばあさんを見つめていました。

おじいさんははっと、気がつきました。

「昨日の小猿じゃ。そうじゃ、昨日の小猿がお礼にきたんじあ。そうじゃ、きつ
とそうじゃ」

おじいさんはおばあさんに昨日の「小猿を助けた話」をしました。

「ふあ〜あん、そんなことがあるんじやなあ」

「じいさんや、あそこ、柿の小山の上に何か「鼓」のような物があるよ」

「本当じゃ、どおれ、手に取ってみよう」

じいさんは柿の小山の上から「鼓」のような物を手にとり、一回、たたいてみま
した。

「ぽん〜」と何とも美しい音がしました。

すると「鼓」の中から、大きな米俵が一俵「どん〜」ととび出てきました。

おばあさんが米俵を開けると、玄米がぎっしり詰まっていた。

「わあ、おたまげた。玄米じゃ、玄米じゃ」

おじいさんが、「ぽん、ぽん」と二回たたくと。

今度は大きな米俵が二俵「どん〜どん〜」とびだしてきました。

「すごい。すごい。こんなに沢山の米。初めて見た」

おじいさんとおばあさんは、それ以上は「鼓」をたたきませんでした。

おじいさんは猿の親子にお礼言おうと、庭のけやきの木を見上げるを、すでに音
もなく親子猿を去っていました。

おじいさんとおばあさんは、沢山の柿の小山。くりの小山。どんぐりの小山を、
柿は干し柿にして、米俵、くり、どんぐりは小屋に大切に保管をしました。

「ばあさんや、この「鼓」は山の神様のものじゃ。あの猿は山の神様のお使
いじゃ」

「わしらはどうにか、山の神さまのお陰で、自然のめぐみを受け生きてゆける。
それで十分じゃで」

「このうちでの「鼓」は、山の神様にお返ししよう」

「そうじゃね。それがいい、それがいい」

清らかな、心優しい二人は、お山の自然に抱かれて、いつまでも幸せにくらしま

した。